



TITLE:

はじめに

AUTHOR(S):

高見, 茂

CITATION:

高見, 茂. はじめに. 教育行財政論叢 2007, 10

ISSUE DATE:

2007-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/66994>

RIGHT:

は じ め に

平成18年度も漸く終盤となった。この2年間研究科長から教務委員長を仰せつかったこともあり、教務全般、入試業務も含めて多忙であった。またこの期においては、大学院改革イニシアティブが採択され、教務との絡みからカリキュラム関係の責任者も務めた。

さらに国立大学を取り巻く厳しい経営環境から外部資金獲得に迫られ、文部科学省の委託事業―新教育システム開発プログラムの公募に応じた。筆者の企画が採択され、平成18年度単年度で2400万円の外部資金の獲得に成功した。研究室にとっては資金的には潤沢であったものの、委託事業関係の仕事は多忙を極めた。幸い院生諸君の協力を得て無事初年度の報告書を出すことができた。

こうした厳しい学内環境に加えて、昨年1月から関西教育行政学会の会長職を預かることとなり、事務局運営に関わって研究室の院生諸氏には大きな負担を掛ける事になった。学会発足当初の半世紀前、大学を取り巻く環境はもっと穏やかで時間はゆっくりと流れていたと思われる。われわれが今置かれている勤務環境とは全く違った環境であったことは想像に難くない。しかし学会運営体制は基本的には半世紀前とほとんど変わっていない。筆者は、時代の変化に応じた無理のない学会運営体制の在り方を検討すべき時期に来ていると強く感じている。

この数年教育行財政論叢の刊行も滞りがちであった。その原因の一つに筆者の多忙があることは否定できない。集中して研究に打ち込み本格的な論文を書く機会はほとんどない。また助手が不在であることもあり、編集事務も筆者が片手間にやるだけではなかなか捗らない。この困難な状況を何とか打開し、スムーズな刊行体制を確保したいと考えている。

大学を取り巻く環境は益々厳しいものとなろうが、院生時代は最も研究に打ち込める絶好の機会である。院生諸氏には、さらに研究成果を上げられることを期待したい。

なお英文校閲については、筆者の友人であるブレンダ金田さんにお世話になった。この場をお借りして御礼を申し上げたいと思う。

2007年3月31日

京都大学大学院教育学研究科
比較教育政策学講座
教授 高見 茂